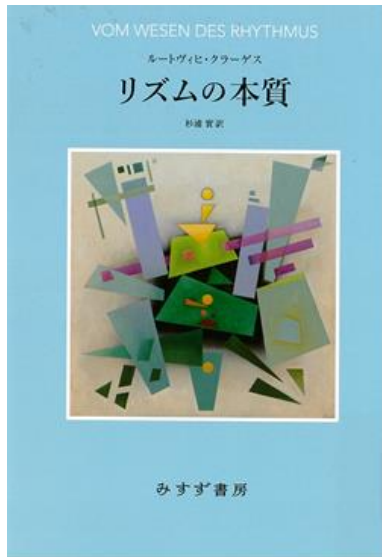


【書評・紹介】

ルートヴィヒ・クラークス、杉浦實 (訳) 『リズムの本質』

(みすず書房、2017 年、142 ページ、2,700 円+税別、新装版 (初版 1971 年))

井上 淳生



本書は音楽学の古典的著作である。著者のルートヴィヒ・クラークス (1872 年生～1956 年没) は、19 世紀末から 20 世紀前半に活躍した在野の研究者である。1944 年出版の『リズムの本質について』(第 2 版) をテキストとした本書は、1971 年に初版として、2017 年に新装版として出版されている。

本書の核となるメッセージのひとつは、「リズム (Rhythmus)」と「拍子 (Takt)」は明確に区別されるべきである、という点である。著者はこのほかに、リズムを「現象」として扱う意義 (第 1 章)、リズムの時間性だけでなく空間性にも注目すべき意義があること (第 7 章) を本書で論じているが、なかでも評者の観点から重要だと思われるのがリズムと拍子の関係である。

著者によれば、リズムとは、人間を含む生物に関わる「一般的生命現象」(pp.21-22) であり、対する拍子は「人間のなすはたらき」(p.22) である。そして、「リズムは、拍子が完全に欠けていても、きわめて完成された形であらわれうるが、拍子はそれにたいしてリズムの共働なくしてあらわれえない。」という (同上)。端的に言うと、リズムは生命の根源に関わる現象であり、拍子はリズムに依存した人為的操作 (精神作業) の産物である。

両者の関係がより具体的に述べられているのが、次の一節である。

もしかりにリズムが拍子と等しいとするならば、肩がこるほど正確にメトロノームにしたがって演奏する初心者の方が、メトロノームどおりに正確にはけっして演奏しない専門家よりも、詩句を韻律にしたがって朗読する子供の方が、韻律どおりにけっして読まない朗詠家よりも、また、分列行進 (評者注：軍隊等で行われる分列隊形による行進) の方が、ひじょうに優美なメヌエットよりも、リズムの完全性の点において優ることになる。そしてまた、運転中のあらゆる機械の方が人間のリズムカルな共同作業よりもリズムの完全性において全く優っているだろう。また、振り時計のティックタックの音や、蒸気ピストンの圧撃音や、電動機の交替破裂音と比較するならば、舞踏や歌唱は低位のリズム現象を意味するにすぎないだろう (p.23、下線は評者による)。

上の引用中で、下線部分がリズムに属する現象であり、各部の前にあるものが拍子に属する現象である。筆者はこの後に、「誰もこんなことを認めるわけにはいかない！」(p.23) と続けている。評者も同感である。リズムと拍子をともに単なる規則の単純性の

観点からとらえるのであれば、メトロノームに（言葉の厳密な意味で）忠実な演奏家がリズムの点において至高の演奏家となる。しかし、著者の言うように、評者もこのことを首肯できないのである。なぜなら、ある演奏に接して「リズムカルで心地良い」と感じる時、その理由を「メトロノームの時間分節に忠実に演奏されているから」に求めることはできないからである。演奏に限らず、私達が日常的に使う「リズム感がある」、「テンポが良い」といった表現の意味するところは、機械のように一定で不変の時間分節に従っているということではないからである¹。

著者は、広義には周期的な運動として使用されてきた「リズム」概念のなかから、人為的に外から導入された規則としての「拍子」を取り出して区別することを提案している。そのことを通して、滴り落ちる雪解け氷、風に揺れる木々の梢、淀みなく流れる川の水、上から下へずんずんと降り続く雪や、不随意に、そして不断に続く心臓の鼓動等、人工的な時間分節とは異なる、自然現象、身体、そして生命に関わるあらゆる周期的運動を「リズム」として理解することができるのである。

以下で、内容について簡単に紹介しておきたい。目次構成は次の通りである。

序文

- 第1章 現象研究の意味について
- 第2章 拍子の仮現性
- 第3章 分節的持続性としてのリズム
- 第4章 意識と体験
- 第5章 リズムの打拍可能性について
- 第6章 反復と更新
- 第7章 リズムの空間・時間性
- 第8章 対極的持続性としてのリズム
- 第9章 拍子の生命内実について
- 第10章 展望

第1章では、リズムを現象学的観点から理解することの意義が強調されている。すなわち、客観的事実（事物）の分析としてではなく、個別具体的な個人の体験という視座からでなければ、リズムを適切にとらえることはできないと著者は論じている。

第2章では、ラテン語の *tangere*（触れる、突く、叩く）に由来する *Takt*（拍子）が取り上げられている。周期的に交替する強音と弱音を典型とする拍子が、人間の精神作業によって人為的に生み出されるものであるという点が強調されている。

第3章では、ギリシア語の *rheinein*（流れる）に由来する *Rhythmus*（リズム）について、分節性ととも持続性を合わせ持つものとしてリズムを理解することが提案されている。その具体例として、著者は、動きのある水面に浮かぶ木片の運動を挙げる。木片の上下運動は「境界を画する打拍」（p.29）に相当するが（分節性）、その打拍によって区切られた境界は実は明確ではない。「上昇運動は下降運動へ、下降運動は上昇運動へ滑らかに移行する」（持続性）からである。

第4章では、第1章でも述べた現象としての生命現象という視座が再度確認されるとと

もに、「リズム体験」(p.49)を通した、無意識的な、睡眠に似た意識状態への道筋が示されている。

第5章では、リズムと拍子には互いに対立する側面もあるのだが、その一方で、ある条件下では互いに融合する側面もあることが示されている。その条件とは、「運動状態の持続価値が、境界づけ作用をする音響の分割価値よりも優勢を保つこと」(p.52)である。すなわち、先に挙げた水面の木片を例にとると、木片が上下する単位時間当たりの振幅よりも、波紋が連続して横に伝播していく動きの方が優勢である時、リズムは拍子によって補強されると言い得るのである。

第6章では、「拍子は反復し、リズムは更新する」(p.57)ことが論じられている。つまり、拍子は人間の精神作業によって同一のものとして反復される一方、「生命事象」(p.61)を含む自然現象によって生み出されるリズムは、すべて類似したものの更新として実現するのである²。

第7章は、リズムの時間性だけでなく、空間性について論じた章である。著者は「現象的には、空間的分節を伴わない時間的分節はないが、また同様に、時間的分節を伴わない空間的分節もない。」(p.73)と述べ、リズムの本質的特徴が、「時間経過に即してとおなじように、空間形態に即して論ずることができる。」(p.73)としている。

第8章では、リズムをその一部とするところの「生命」と、拍子をその一部とするところの人間の「精神」との関係について、これまでの章を踏まえた考察が行われている。著者の関心は、リズムと拍子との関係を入口にして、「生命(自然)」と「精神(人為)」の関係へと向かっている。著者はここで、拍子が「生命」と「精神」の結節点になりうる可能性について示唆している。

第9章では前章を受けて、「生命」と「精神」の関係が論じられている。著者は、湿地ではわずかにしか根を張らない植物が砂漠ではその何倍もの長さで深さを張ることがあることを例に、生命体は抵抗があることによってその生命力を増進させると説く。そして、これをリズムと拍子との対立に適用し、拍子がリズムをより豊かにする役割を果たすと主張している。

第10章では、リズムの「喜び」は何に由来するのか(p.100)という問いが冒頭に挙げられている。著者は3つの舞踊を例に挙げ、「抑制感情から自由であること、または自由になったこと」(p.103)を「リズムカル」の源とした。著者は「リズムのなかで振動することは、・・・(中略)・・・生命の脈動のなかで振動することを意味し、・・・(中略)・・・精神をして生命の脈動を狭めせしめている抑制から一時的に解放されることを意味する。」と述べ、「精神による抑制」からの解放を、リズムの喜びと結論付けている。

以上、内容について紹介してきたが、本書が極めて理論的知見を含む壮大な著作であることがお分かり頂けるだろう。本書と対峙した今、今後必要になることは、本書の知見に対する、具体的な事例による検討、そして更新の作業である。議論を抽象レベルに留めておくのではなく、現実の具体的事例の検討を蓄積していく必要があるだろう。また、「拍子」と「リズム」の関係にとどまらず、リズムを時間性と空間性の両面からとらえるという点は、近年の、舞踊と音楽の双方を視野に入れた研究(舞踊=音楽研究)を進めていく上でも極めて重要である。

最後になるが、評者の研究と本書との関係について記させて頂きたい。評者と本書の出

合いは、国立民族学博物館で開催された共同研究会においてである。研究会は、民族音楽学者を数名含む音楽研究者から組織されたものであり、評者はそこで、舞踊研究の立場から、動きと音楽の関係について報告した³。

報告の中で、評者は次のような問いを提示した。それは、「踊り手は音楽とどのように出合うのか？」というものである。評者はこれまでに、社交ダンスという特定のジャンルにおいて、舞踊（身体運用）と音楽が「カウント」を介することで緊密な関係に整備されてきたことを論じてきた（井上 2018）。この報告で問いたかったのは、人為的に外部から導入された「カウント」に居心地の悪さを感じる踊り手が、「カウント」とは違う経路を通じていかに音楽と出合うことができるのか、というものであった。研究会を通して、評者は次のような示唆を得た。それは、カウントとは舞踊と音楽が出合うために人為的に設定された「補助線」であり、音楽に潜在するリズムとは分けて考える必要がある、という点である⁴。

この点を踏まえると、評者が社交ダンスにおいて「カウント」として理解してきたものは、本書でいう「拍子」に相当する。そして、「カウント」とは違う経路を通じて音楽に合わせて踊ろうとする試み（音楽を踊る）は、本書でいう「リズム」との同一化を目指した試みであったと理解することができる。本書を参照すると、評者の探求の過程はこう表現することが可能となる。そうすると、次なる探求のひとつの方向は、音楽と向き合う踊り手がリズムと出合う具体相であり、そこに拍子がどのように関わるのかについての極めて具体的な分析となる。

心地良い車の振動にいつの間にか眠りに落ちている経験は誰しもあるはずである。本書の議論に照らすならば、眠りに至る振動の規則性はリズムのなせる業であり、決して人為的に分節された拍子によって可能になったわけではないのである。

現時点で評者は、リズムについて未だ十分に満足のいくような言語化ができていない。しかし、本書が、評者が日々現場で感じる「舞踊＝音楽関係」をめぐる問いを適切に読み解く手がかりになると確信している。

1. このことを理解するうえで、対話中の相づちを例にとると分かりやすい。こちらの発話に対する相づちが、数学的に厳密な時間分節によってなされる状況にあって、その対話を「リズムカルで心地良い」と評価することは稀ではないだろうか。
2. 拍子は同一のものの反復として表れるため、正確な計算が可能である。一方のリズムは、類似してはいるが同一ではないものとして表れるため、近似はできるが正確な計算の点では拍子に劣る。この点を指して、著者は「反復は計算しうるが、更新は評価しうる」（p.62）と述べている。
3. 国立民族学博物館共同研究「音楽する身体間の相互作用を捉えるーミュージッキングの学際的研究」（代表：野澤豊一）。評者はそこで「音楽と格闘する踊り手ー社交ダンスを素材に動きと音楽の関係を描くー」と題して報告した（2019年7月6日）。
4. それまでの評者の関心の中心は、「カウント」という人為的な時間分節であり、それとは異なる「自然で心地良い」時間分節に対しては、何から手を付けて良いかが見えていなかった。

参考文献

井上淳生

2018 「舞踊と音楽の不可分性ー日本の社交ダンスにおける踊り手と演奏家に注目してー」
『Contact Zone』10:41-71.

（いのうえ・あつき／北海道地域農業研究所）